

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が3例あります(散発 1例, 家族 2例)。型別は、いずれもO157(VT1・VT2)です。本年の累積報告数は18例となっています。詳細は下記ホームページをご覧ください。
○京都市感染症情報センターホームページ「腸管出血性大腸菌感染症発生状況」
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000068305.html>
- パラチフスの報告が1例(女性, 20歳代)あります。推定感染地域は国外(カンボディア)で、推定感染経路は不明です。本年の累積報告数は2例となっています。
- レジオネラ症(肺炎型)の報告が、1例(男性, 50歳代)あります。症状は発熱・咳嗽・肺炎です。推定感染地域は国内で、推定感染経路は塵埃感染です。本年の累積報告数は4例となっています。
- 梅毒(早期顕症・Ⅱ期)の報告が1例(男性, 50歳代)あります。推定感染地域は国外(大韓民国)で、推定感染経路は性的接触です。本年の累積報告数は3例となっています。
- ヘルパンギーナの定点当たり報告数は2.29(94例)で、前週 2.70(108例)より減少しているものの、第26週(6月24日～6月30日)以降、7週連続で過去5年平均値を上回っています。今後の動向にご注意ください。

◆ 定点医療機関の追加について

第32週から伏見区の1定点が追加され、インフルエンザ定点 68, 小児科定点 41となりました。

◆ 今週のトピックス: <手足口病>

手足口病の定点当たり報告数は、5.20(213例)で、前週 5.95(238例)より減少しましたが、依然として、警報開始基準値(*)『5.0』を超えています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 二類:結核 8例(肺結核 6例, その他結核 1例, 潜在性結核感染者 1例)うち喀痰塗抹陽性 6例
【1月以降の累積報告数 248例(肺結核 133例, その他結核 62例, 潜在性結核感染者 53例)うち喀痰塗抹陽性 78例】
- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 3例【1月以降の累積報告数 18例】
三類:パラチフス 1例【1月以降の累積報告数 2例】
- 四類:レジオネラ症(肺炎型) 1例【1月以降の累積報告数 4例】
- 五類:梅毒(早期顕症・Ⅱ期) 1例【1月以降の累積報告数 3例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 手足口病	5.20	213
	② ヘルパンギーナ	2.29	94
	③ 感染性胃腸炎	2.00	82
	④ 水痘	0.46	19
	⑤ 突発性発しん	0.39	16
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

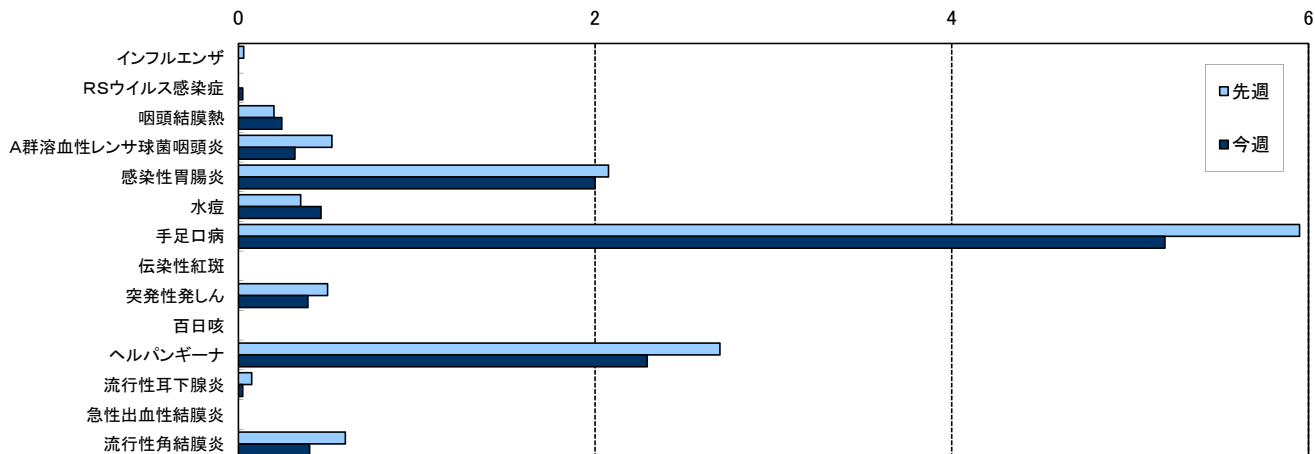
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <手足口病>

(注)京都市のデータは、平成25年8月15日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

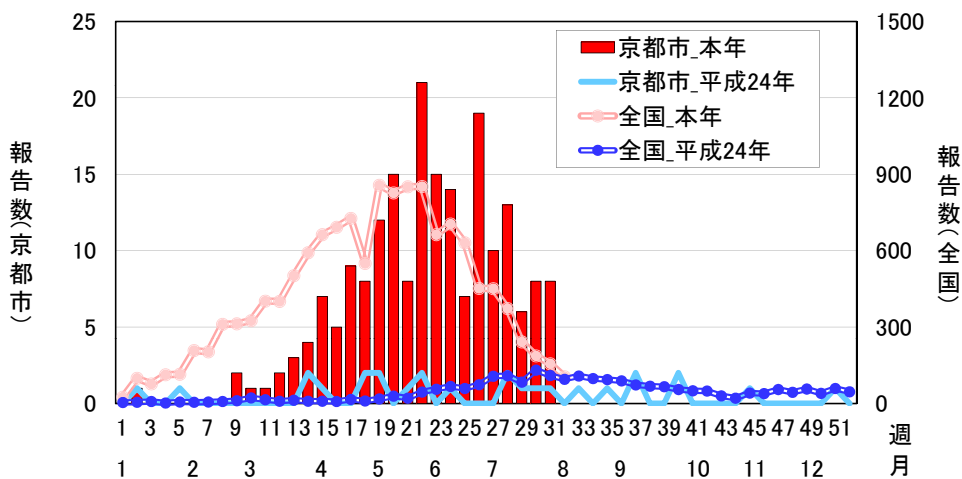
1 今週(第32週)と先週(第31週)の定点当たり報告数の比較



2 風しんの推移

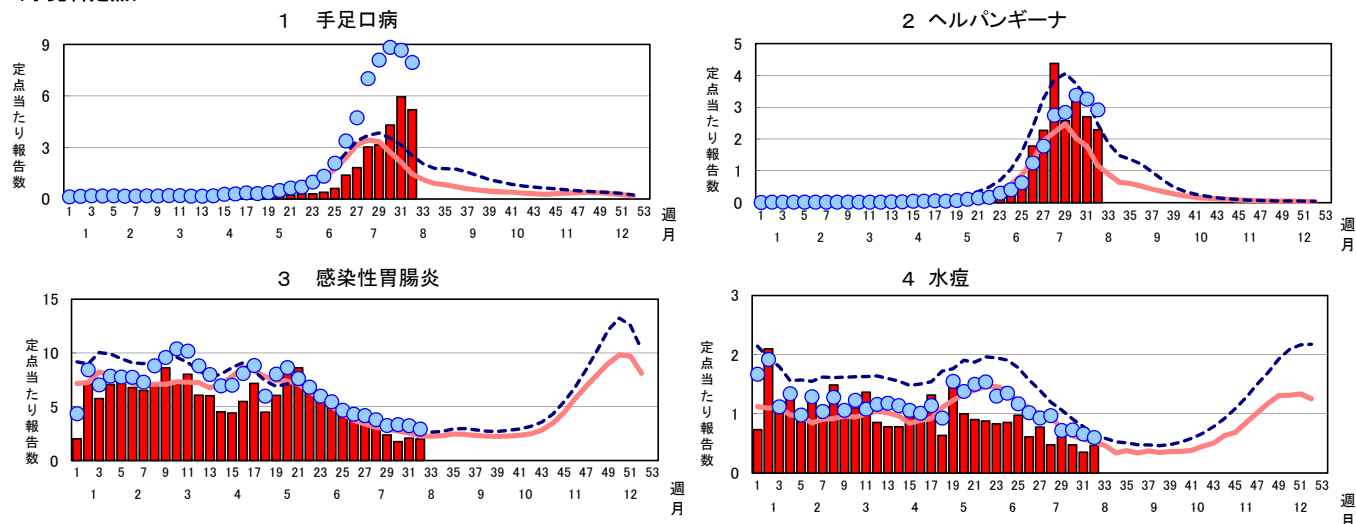
今週の報告数(累積報告数)
平成25年8月15日現在

京都市	0例 (199例)
京都府(京都市を除く)	3例 (106例)
近畿6府県	27例 (5050例)
全国	108例 (13674例)

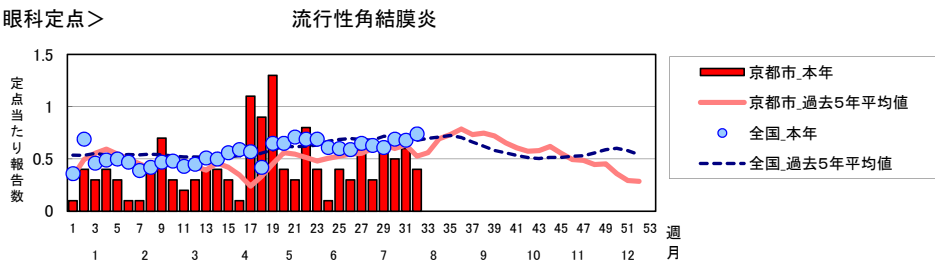


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第32週(8月5日～8月11日)トピックス: <手足口病>

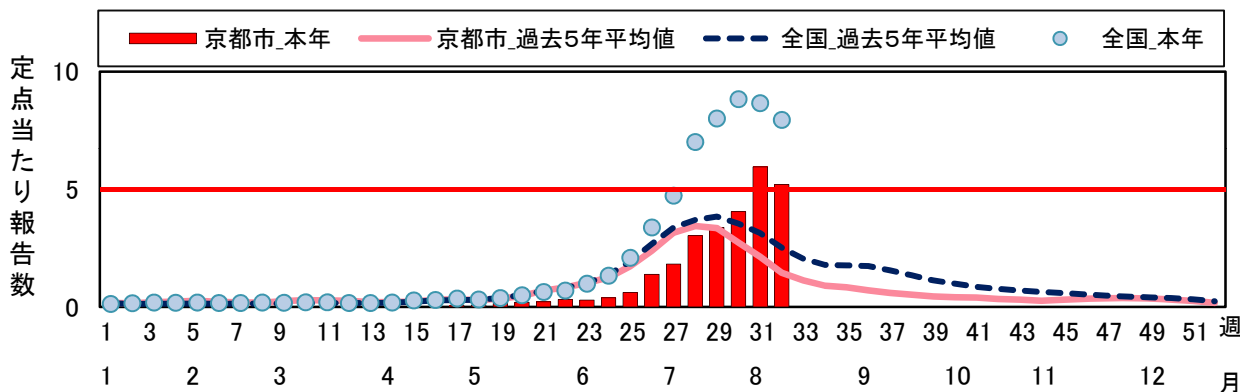
手足口病の定点当たり報告数は、5.20(213例)で、前週 5.95(238例)より減少しましたが、依然として、警報開始基準値(*)『5.0』を超えています。警報開始基準値『5.0』を超えたのは、昭和57年に感染症発生動向調査が開始されて以降、最も多かった平成23年以来2年ぶりです。

全国の定点当たり報告数(7.95)においても前週(8.66)より減少したものの、都道府県別においては、47都道府県中22道県で前週より増加しており、38都府県で警報開始基準値『5.0』を超えています。また、近畿6府県では、京都府を除く5府県で警報開始基準値を超えています。

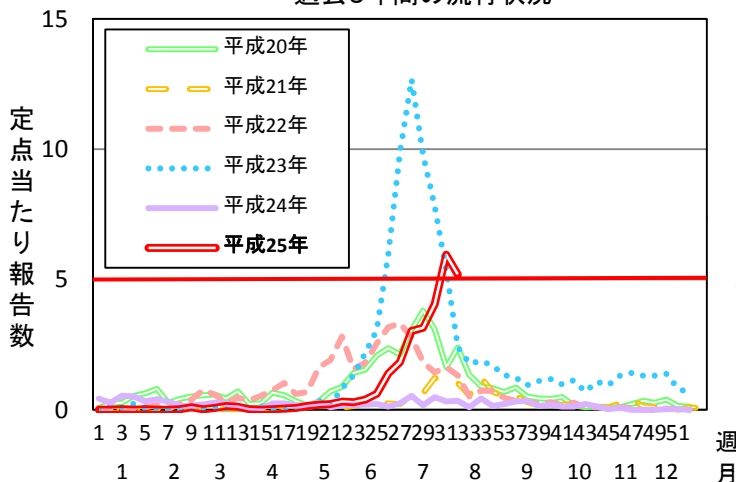
京都市の年齢階級別では、1歳が72例(33.8%)と最も多く、以下、2歳 46例(21.6%)、3歳 29例(13.6%)、0歳 23例(10.8%)、4歳 20例(9.4%)となっており、0歳～4歳で89.2%を占めています。

(*)警報開始基準値とは、大きな流行が発生または継続しつつあると疑われることを意味し、国立感染症研究所感染症疫学センターがこれまでの感染症発生動向調査データから、基準値を定めています。

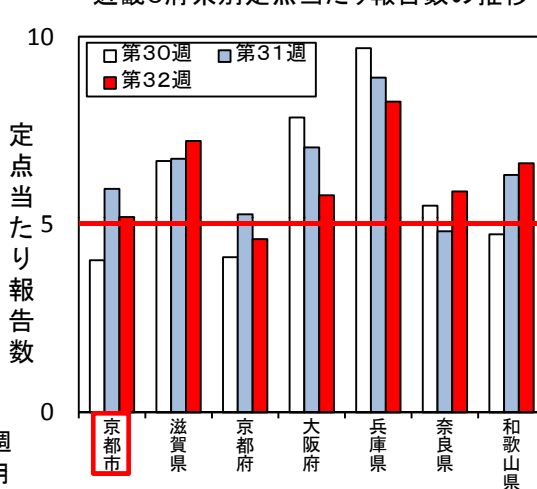
本市及び全国の定点当たり報告数の推移



過去5年間の流行状況



近畿6府県別定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移

